

サヴォナローラの説教におけるフランス王シャルル8世の二つの役割

小西 礼子

はじめに

ナポリの王位継承を主張してイタリアを南下したフランス王シャルル8世がフィレンツェに入市したのは、1494年11月17日であった。本稿では、ジローラモ・サヴォナローラ Girolamo Savonarola がその前後の時期にフィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ教会（ドゥオーモ）で行った連続説教『ハガイ書についての説教』*Prediche sopra Aggeo*⁽¹⁾を用いて、彼が捉えたフランス王シャルル8世の二つの役割について論考する。

これまで、サヴォナローラの「預言」に関して、シャルル8世との関係について言及した研究は、私見の限りでは、あまり見られない。G. C. ガルファニーニは、サヴォナローラの1494年の待降節とその翌年の説教についての論文「La predicazione sopra Aggeo e i Salmi」において、専らサヴォナローラの説教の政治的側面、または彼の「預言」と政治的思想の関係について論じ、同時期にフィレンツェに侵攻したフランス王については何ら述べていない。⁽²⁾また、L. ベッレグリーニは、サヴォナローラの名が、フランス軍に対する政府代表交渉団のひとりに選出されたことによって始めてルカ・ランドゥッチの『日記』に記されたことを論拠として、それまでは多数のうちの一人の説教師にすぎなかったサヴォナローラが、預言的説教師としての地位を確立したとしているが、その後のシャルル8世の行動とサヴォナローラの「預言」の内容の関係については言及していない。⁽³⁾一方、これらに対して R. フビーニは、15世紀の公会議主義の文脈においてサヴォナローラの唱える「預言」すなわち教会改革を考察し、公会議を召集し得るフランス王のフィレンツェ侵攻の意義の重要性を強調している。⁽⁴⁾

1. 「神罰」と「解放者」

まず、前稿⁽⁵⁾に基づいて、本稿の問題点を明確にしておきたい。

シャルル8世のフィレンツェ入市以前から、サヴォナローラの説教の内容は、1484年に受けたとされる「教会は罰せられ、改革される、それもすぐに」という「神の啓示」に基づいた、「神罰」に備えた「悔い改め」を勧告する預言的説教であった。そのため、一般に当時は外国軍の侵入は死者を伴う一種の戦争と考えられていたので、接近するシャルル8世とその軍隊は、サヴォナローラにも、そして彼の説教を聴くフィレンツェ市民にも「神罰」として容易に認識された。

実際、サヴォナローラは、前稿で論じたように、この事件の約半年後に「これまで説教してきたこと」を著した『天啓大綱』 *Compendio di Rivelazioni*⁽⁶⁾において、フランス王と軍隊のイタリア侵攻が、『創世記』における洪水、すなわち、それまでの預言的説教で繰り返された「神罰」であるという認識を示している。しかし、シャルル8世に対して「とうとうあなたは来られた、王よ、あなたは来られた、神の遣いよ、あなたは来られた、正義の遣いよ。」と記し、彼が恐るべき「神罰」であると同時に、到来を歓迎すべき「キュロスに似たもの」すなわち「解放者」であるとも述べている。サヴォナローラは、このシャルル8世の「解放者」という役割について、「特別な事柄はそのままにしておいた。混乱を引き起こさないために、私は語らなかったのだ。」と言い、シャルル8世が「解放者」でもあったということは、当初から彼の「預言」の一部であったと主張している。だが、『天啓大綱』の文脈において、この主張に対する唐突な感じは否めない。

そこで、本稿では、冒頭でも述べたように、このシャルル8世に対する「神罰」と「解放者」という相反する二つの役割に着目し、シャルル8世とフランス軍がフィレンツェを通過した時期にサヴォナローラが行った『ハガイ書についての説教』において、これら二つの役割がどのように表現され、形成されていったのかを検討する。また、これら二つの役割の相互関係、さらにはサヴォナローラの預言とそれらとの関係についても考察したい。

尚、本稿では、テキストとしてサヴォナローラ国定版全集 (Edizione Nazionale delle opere di Girolamo Savonarola) に収められた『ハガイ書についての説教』を用いる。

2. 「神罰」

サヴォナローラの『ハガイ書についての説教』は、1494年11月1日から12月28日まで行われた、待降節（クリスマス前の四週間）のための23回の連続説教である。シャルル8世が率いるフランス軍は、10月下旬にはフィレンツェ近郊に到着し、10月26日には、ピエロ・デ・メディチが政府の許可を得ることなく、交渉のために単独でフランス王の駐留地に赴いたが、結局失敗した。したがって、フィレンツェでこのサヴォナローラの説教が始まったのは、フランス軍の進軍に伴う危機的状況においてであった。本章では、シャルル8世のフィレンツェ出発以前に行われた6回目までの説教を取り上げ、「神罰」についての記述を検討する。

(1) 「神罰」の原因と「薬」

サヴォナローラは、11月1日に行われた1回目の説教で、当時のフィレンツェの状況を、医学に例えて以下のように述べている。

あなたに言う、原因もなくこのような試練が与えられることはない。[・・・] あなたの非

回数	日付	説教の主題
1	1495年11月1日	悔い改めよ、天上の国が近づくだらう。
2	11月2日	光を持っている間に進みなさい、暗闇があなた方を囲まないように。
3	11月3日	光を持っている間に進みなさい、暗闇があなた方を囲まないように。
4	11月9日	正義の犠牲を捧げなさい、そして神に願いなさい、なぜなら神は誠実で慈悲深いから、云々。
5	11月16日	全ての子孫から蝕むことのできる者を取り除きなさい、云々。
6	11月23日	神がそれを外から閉じる。
7	11月30日	祝福された神、そして私たちの主のイエス・キリストの父、そして全くの慰めの神、私たちを慰める、云々。
8	12月7日	神に新しい歌を歌いなさい、なぜなら奇跡を行ったから、云々。
9	12月8日	主を畏れる祝福された人は、主の戒めに深く飛び込むだらう。
10	12月10日	喜ばしい人、施し、貸し与える人は、云々。
11	12月12日	貧しい人々に分け与え、ゆだねなさい、その正義は永遠に留まる、云々。
12	12月13日	もし神が神殿を建てないならば、それを建てる人々は虚しく働いた。
13	12月14日	地を信じる人々よ、注意しなさい、そして、畏怖において主に従い、戦慄と共に主に歓声を上げなさい。
14	12月15日	もし神が神殿を建てないならば、云々。
15	12月16日	今、したがって、あなた方の心を定めなさい、云々 (ハガイ書1章)。
16	12月17日 (18日)	あなた方の道の上にあなた方の心を定めなさい (ハガイ書1章)。
17	12月18日 (19日)	山に登り、木を運び、そして私の神殿を建てなさいと主は言われる (ハガイ書1章)。
18	12月19日 (20日)	そしてシャルティエルの子ゼルバベルは聞いた (ハガイ書1章)。
19	12月21日	主を褒め歌いなさい、すばらしいから (詩篇146章)。
20	12月23日	告白において神に歌いなさい (詩篇146章)。
21	12月25日	ダレイオス王の第2年に、云々 (ハガイ書2章)。
22	12月27日	これをあなた方の中に感じなさい、私たちの主イエス・キリストにおけることを、云々。
23	12月28日	なぜ人々は騒いだのか、そして中間の人々は空虚だ (詩篇)。

表1 『ハガイ書についての説教』が行われた日と説教の主題

(Prediche sopra Aggeo より筆者作成)

常な邪悪さ、それ故に、おお、イタリアよ、おお、ローマよ、おお、フィレンツェよ、あなたの無情さ、あなたの姦淫、あなたの高利、あなたの残酷さ、あなたの悪辣がこのような試練を呼び寄せている。ほら原因だ、そしてもしこの悪の原因をつきとめたなら、その薬を探しなさい。悪の原因を取り去り、治療せよ、なぜなら原因を取り去れば、結果も取り除かれる。罪をぬぐいさえすれば試練はあなたを苦しめはしないだろう。そして、もしこのようにしなければ、他の何もあなたには役に立たないと言う私を信じるだろう。イタリアやフィレンツェよ、もし私が言うことを信じなければ、あなたは間違っている。つまり、悔い改め以外は他の何もあなたを助けることはできないのだ。あなたの好きなようにやりなさい、これ[悔い改め]なしでは全てが無駄になるだろう。あなたにもそれがわかるでしょう。[・・・] 悔い改めが唯一の治療法だ、そして、もしあなた方だけが真の悔い改めを行うならば、試練の大部分は取り去られるだろう。悔い改めよ。試練の原因である罪を取り去りなさい。[・・・] 私はあなたに言おう、フィレンツェよ、大声で訴える以外に私にすることはない、悔い改めよ。⁽⁷⁾ ([]内は筆者の補足。以下同様。)

すなわち、フィレンツェやイタリアには数々の蓄積された罪が原因となり、その結果、神によって「試練 tribulazione」がもたらされる。そして、それを回避するには、個人の「悔い改め」だけが唯一の方法である、という解釈である。サヴォナローラの言う「試練」が、この時期すでにフィレンツェ近郊に迫っているフランス軍を示しているのは明らかであろう。しかし、この時点ではまだ、フィレンツェにはそれを避けるための「薬 medicine」や「治療法 remedio」は残されており、「試練」の到来までの時間的余裕、もしくは到来しない可能性があることも述べられている。すなわち、「試練」はまだ絶対的ではないことを示している。

また、上記引用中では、フィレンツェ（市民）やイタリアの犯した罪＝「試練」の原因を邪悪、無情、姦淫、高利などと具体的に列挙しているが、以下に示したように、同じ説教の後半ではさらに多くの罪を挙げている。

おお、イタリアのすべての都市よ、あなた方の罪を罰する時が来た。おお、イタリアよ、あなたの淫蕩のために、あなたの吝嗇のために、あなたの高慢のために、あなたの野心のために、あなたの略奪と虚偽のために、あなたには多くの災難が降りかかり、多くの鞭があなたに振り下ろされるだろう。「大声で言いなさい」という声。「大声で言いなさい」という声。おお、フィレンツェよ、あなたの罪のためにあなたには災難が降りかかる。おお、フィレンツェよ、フィレンツェよ、フィレンツェよ、あなたの罪のために、あなたの虐待のために、あなたの吝嗇のために、あなたの淫蕩のために、あなたの野心のために、多くの苦悩と災難が降りかかるだろう。「大声で言いなさい」という声。そして、あなたは何を大声で言うのか。

おお、司祭よ、司祭よ、司祭よ、あなたのためにこの嵐が生じた。おお、司祭よ、これらの災難の主な原因はあなただ、そして、あなたの悪によってこの嵐がやって来る、あなたの罪によって多くの試練が近づいた。⁽⁸⁾

ここでは、都市（市民）の罪と同様に、特に司祭（聖職者）の罪について言及し、その悪によって「試練」がもたらされたことを非難している。これは、サヴォナローラが受けた神の啓示「教会は罰せられ、改革される、それもすぐに」を意識し、彼の最終目的が「教会改革」であることを明示しているといえよう。したがって、「悔い改め」は平信徒の市民だけに該当する問題ではなく、聖職者たちにも必要な「治療法」である。

続く11月2日と3日にも2回目と3回目の説教が行われ、「試練」の接近への警告と、それに備えるための「悔い改め」の実施への勧告を何度も説いている。実際、サヴォナローラは「悔い改めよ *Agite poenitentiam!*」というフレーズを1回目の説教では14回、2回目には6回、そして3回目には12回繰り返している。

(2) 箱舟の建設

11月5日、サヴォナローラは市政府代表交渉団の一員として、ピサでフランス王と会談した。⁽⁹⁾その内容を、サヴォナローラは『天啓大綱』において描写している⁽¹⁰⁾が、実際に両者が何を語ったのかは不明である。しかし、この会談は、サヴォナローラの説教内容に変化をもたらした。すなわち、その後行われた4回目から6回目の説教では、1回目から3回目までの説教ではあまり見られなかった『創世記』のノアの箱舟を引用して、「試練」＝フランス軍とフィレンツェの距離を具体的に示し、箱舟を建設してそれに備えることを説いている。箱舟は、神によって下される大洪水に対する避難所である。したがって、箱舟への入場を促すことにより、前項で述べたように、「悔い改めれば回避の可能性がある」と、やや精神的、時間的に余裕をもって捉えられていた「試練」が、到来時には箱舟に避難はできるが、到来自体を避けることはできない神による決定的事項となったことが認識されたといえよう。

まず、11月9日の4回目の説教では、次のように述べている。

わたしたちは、わたしたちの箱舟をどこに置き忘れていたか覚えていなければならない、そして、それはまだ閉じられておらず、中には動物たちが入れられていた。それぞれが悔い改め、箱舟に入るようになさい。⁽¹¹⁾（下線は筆者。以下同様。）

この時点で、箱舟は「まだ閉じられていない」、すなわち「試練」＝フランス軍との距離があり、「悔い改め」によって救済される余地が残されていることを示唆している。そして、重ねて「悔い改め」

＝箱舟に入ることへの勧告を繰り返している。

そして、あなた方女に言う、あなた方の虚栄心や高慢さを捨てなさい。私が何度もあなた方に言ったように、悔い改めるべき時だ。もし、神が彼の教会を革新するために与える、そしてこれから与えるだろう試練の洪水の中に落ちたくなければ、これ以外に他の救済方法は無い。¹²

続いて、フランス軍のフィレンツェ入市前日の11月16日に行われた5回目の説教では、以下のよう
に、箱舟が閉じられることを言った。

私はキリストと共に私の肉体を磔にした。わたしはあなた方にこの世の短さとはかなさを、地獄の悲惨さと永遠の生の栄光を考えさせた。そしてあらゆる私たちの希望を私たちのために磔にされたキリストに託さなければならないことを示した。そして、私たちは入りたがっていた人々を箱舟の中に導いた。そして、今朝は一般にこの糧についてさらにあることを言おう、箱舟を閉じる時だ、なぜなら洪水が近づいているからだ。¹³

前回の説教から一週間がたち、「試練」との距離が縮まったことを示している。また、それに伴うフィレンツェの緊張感が高まっていることも感じられよう。

さらに、フランス軍のフィレンツェ駐留中の11月23日に行われた6回目の説教¹⁴では、「神は箱舟を閉じたがっている」¹⁵と述べ、終に「試練」が到来したことを告げた。この説教では他の箇所でも、「箱舟の中にしっかりと立ち、外に出てはいけない。なぜなら、今朝は私たちがそれを閉じるからだ」¹⁶、「箱舟を閉じなければならない時だ。もし他に入りたい人がいて、あなたがもう待たないとしても、みなに呼びかけましょう」¹⁷、そして「来なさい、なぜなら私たちは箱舟を閉じたいから」¹⁸と箱舟が閉じられることが何度も繰り返され、フランス軍駐留によってもたらされたフィレンツェの危機的状況における救済の重要性と緊急性が高まっていることが窺える。

おお、フィレンツェよ、おお、イタリアよ、おお、教会よ、神は何度あなたに、悔い改めよ、なぜなら洪水が来るから、と呼びかけ、大声で言ったことか。そして少しの人しか改心しようとはしなかった。主は言う、神によって与えられた段階まで来た者、残留した者のために箱舟を閉じなさい。他の者は、来たいとも善き行いをしようとも思わなければ、地獄に行くだろう、と。¹⁹

また、上記では、サヴォナローラはこれが神によって遣わされた「試練」であり、神に従う者のみ

が救われることを明言している。すなわち、自らの預言的説教内容が実現したことの確認である。

サヴォナローラは、6回目の説教の後半部でも、「主は、閉じなさい、箱舟を閉じなさい、という。さあ、もしだれか他に來たい人がいたなら、わたしはもう一度呼びかけたい」²⁰⁾と、救済の手を差し伸べ続けるが、最終部では終に「箱舟を閉じよう、なぜなら皆が呼びかけられ、もうだれも聞いてなかったという言い訳はもたないから」²¹⁾と述べ、箱舟の中で神が守ってくれることを約束して、説教を終えた。

本章では、『ハガイ書についての説教』の1回目からフランス軍のフィレンツェ駐留中に行われた6回目までの説教について検討した。サヴォナローラは、シャルル8世とその軍隊を「神罰」と捉え、それらとフィレンツェとの距離、また接近に伴う危機感に即して、説教内容を巧みに変化させた。そして、このような社会の変化を反映させた説教が、聴衆に多大な影響を与えたであろうことは想像に難くない。

しかし、これまでの説教では、「神罰」の到来とそれに備えた「悔い改め」がメインテーマで、「神罰」の到来後の世界の状態について、それがいいものなのか、さらに悪いものなのかなど、何ら語られなかった。そこで、次章では、フランス軍の出発後に行われた説教内容にどのような変化が見られたのかを検討してみよう。

3. フィレンツェの「解放者」

11月26日、シャルル8世がサヴォナローラと3度目の会談をした後、11月28日に、シャルル8世の率いるフランス軍は、同時代のフィレンツェ富裕商人であるピエロ・パレンティの言葉を借りれば「奇跡的」²²⁾に平和的にフィレンツェを出発した。また、サヴォナローラの信奉者であるルカ・ランドウッチは、この出発について彼の日記に以下のように記している。

1494年11月28日金曜日に、フランス王が正餐の後、出発し、チェルトーザの宿泊先に向かった。すべての軍隊も彼の前後について行き、小数が残った。私たちの有名な説教師であるフェッラーラ出身のジローラモ修道士が、王のところへ赴いて、滞在しては神の意思を行なうことにはならない、出発すべきだと彼に言ったと言われていた。さらに人が言うには、王が出発しそうにないのを見るともう一度[王のもとに]赴き、王は神の意思を行っていない、そして他人の上にはふりかかるはずの惨禍が、王の上に戻ってくださうと彼に言ったということだった。そして、このことが、王がより急いで出発した理由だと考えられた。なぜなら、人々は、この時期には、フィレンツェでもイタリア全土でも、このジローラモ修道士は預言者で正しい生き方の人であると考えていたからだ。²³⁾

すなわち、彼はサヴォナローラの「預言者」としての意見により、シャルル8世がフィレンツェを出発することを決意したと捉えている。

サヴォナローラ自身は、フランス軍の「平和的」通過について、『天啓大綱』において、「神の慈悲が、フィレンツェの人々を巨大な危機から解放したことは、全ての人々が証人である」²⁴⁾と記し、「預言者」としてのサヴォナローラの説得が成功したことを強調している。

『ハガイ書についての説教』では、フランス軍のフィレンツェ出発後の11月30日の7回目の説教において、「箱舟が閉じられ、鍵がかけられた後、私たちは大いなる危険の中にいたが、神の慈悲によって、今この試練をやり過ごした」²⁵⁾と述べ、シャルル8世とフランス軍の出発により「試練」が過ぎ去ったことを告げた。そして、「主に多くの恩恵について感謝しなさい、彼はどれほどの慈悲を直ぐにあなた方に行ったことか」²⁶⁾と、また「神はあなたを愛している、フィレンツェよ。彼はあなたに対して慈悲深くふるまわれた、彼の愛以外に理由は考えられない」²⁷⁾と、フィレンツェに神の慈悲がもたらされた喜びを表している。

旧約聖書においてユダヤ民族をバビロニア捕囚から解放したペルシア王「キュロス」の名が登場するのは、次の12月7日の8回目の説教である。

フィレンツェよ、私はあなたにこう言おう、あなたが失ったと思われる英知を革新しなさい。すべてのことについて神に頼りなさい。そして軍隊やキュロスを恐れるな。彼はバビロニアやエルサレム、つまり教会に対して悪い建物を壊し、そして革新するために来るのだ。²⁸⁾

ここで初めてフランス王をキュロスと捉え、彼とフランス軍に対して現状を打破し、革新する存在という肯定的な見解を示した。

さて、ノアは息子たちとさらに話を始める。聴いておきなさい。ノアの息子たちが父親に“試練の洪水が来ることや箱舟の中にいることは、これからどうなるの、またどうするの”と言った。ノアは“洪水によって、世界が一新されたように、このように神は、箱舟に入っている人々と共に彼の教会を革新するために、これらの神罰をくだしている”と答えた。しかし、このような時代に押し流されないことは、廃れもせず、また新しくもならないということに注意しておきなさい。神、至福の人々、そして天国は廃れず、時の影響下にはない。しかし現世の基本要素で構成された事柄は衰え、廃れる。そして新しくする必要がある。信者の団結や善い行いによって構成され建てられたキリストの教会も同様に、信者の団結や善い行いが衰える時には、廃れたといわれ、そして新しくする必要がある。²⁹⁾

また、上記のように、「試練」をも革新を導く肯定的な事象として認識した。フランス軍のフィレ

ンツェ出発以前には、ただ恐れるだけであった洪水がその後の改革と結びつき、両者が同じライン上で捉えられたのだ。そして、それは「教会は罰せられ、改革される、それもすぐに」という神の啓示においては、「罰せられる」時が過ぎ、「改革する」時が来たことが示している。したがって、サヴォナローラの説教の変化の契機となったのは、フランス軍の出発、とりわけ「平和的」な出発であったことは明らかであろう。

『ハガイ書についての説教』では、この後、12月には15回の説教が行われたが、次第に預言的要素は希薄になっていく。それらは、一般に「政治的説教」といわれる、サヴォナローラがフィレンツェの新たな統治体制決定について多くの助言を与えた説教であり、その中で彼は、もし改革が行われるならフィレンツェは「神の都市と呼ばれ、今までになかったくらいより富み、権力をもち、栄光にみちあふれるだろう」³⁰と繰り返し、政治改革を促した。また、フランス軍通過以前のサヴォナローラの説教のキーワードが「悔い改めよ」であったとするならば、「普遍的な平和 Pace universale」³¹が後半の説教のそれであろう。神によって遣わされた「キュロス」が解放したフィレンツェは、いわば「神が建設を望んだ新エルサレム」³²であり、そこでは平和が求められた。また、実際に統治体制の選択を巡る市民間の争いに対する、聖職者としての純粋な希望かもしれない。

4. 「真の預言者」

シャルル8世と軍隊のフィレンツェ進軍は、これまで述べてきたように、サヴォナローラの説教内容に多大な影響を与えた。しかし、それだけでなく、サヴォナローラ自身の立場にも確固とした変化をもたらした。

一般に、神の啓示(=預言)を受けるということは、非常に主観的な体験である。³³神の啓示の内容が未来に関することなら、その時期が来て、啓示内容が現実に起こらない限り、客観的に神の啓示を受けたことや啓示の内容を証明することは難しい。

この意味において、サヴォナローラにとって、フランス王シャルル8世と軍隊のフィレンツェ接近には、重要な意義があったといえる。先述したように、サヴォナローラは、1484年にフィレンツェ近郊のサン・ジョルジョ修道院で受けた「教会は罰せられ、改革される、それもすぐに」という「神の啓示」の体験以来、一貫して「神罰」の到来とそれに備えた「悔い改め」を説く預言的説教を続けていたが、「神罰」はいつ、どのように到来するのか、その具体的内容は語らなかった。しかし、フランス軍がイタリアに進軍しフィレンツェに接近した時、聴衆は、それがサヴォナローラの受けた「神の啓示」の一部、「罰せられる」という部分の実現、すなわち「神罰」の到来であることを理解し、サヴォナローラを「預言者」として認識したのである。また、同時にサヴォナローラ自身も、『ハガイ書についての説教』全体において、自らが「預言者」であることを繰り返し明言している。

1回目の説教では、「何年も前、人々が、今近づいている、山の向こうからやってくる、このよう

な戦争のいかなる噂も気配も感じる前に、大きな試練があなたに告げられたことを知っているだろう。³⁴と述べ、「山の向こうからやってくる」という表現によって、アルプスを越えてイタリアに進軍してきたフランス軍を示している。そして、フランス軍のフィレンツェ接近のことを「戦争 guerre」と表現して否定的に捉え、それがフィレンツェにとって「試練」であることを明確にしている。また、同じ1回目の説教において、「フィレンツェよ、あなたは、何年もの間、私が神から発せられたこのような言葉をあなたに言い続けてきたことを覚えてはいない。」³⁵と言い、さらに、続く2回目の説教においても「そして、だが、私はあなたに過去に何度も言ったし、説教した。人がいかなる試練をも見なかった時に。悔い改めよ、悔い改めよ。あなたが未来の試練から苦しめられる前に。」³⁶と繰り返している。これらの「何年もの間、言い続けている」というフレーズは、フランス軍の到来がそれ以前の説教で唱えてきた「神罰」の到来であったことを強調し、自らの「預言」が実証されたことを確認している。

さらに、「私の言葉を聞きなさい。私からではなく、神によって発せられた言葉として」³⁷、また、「さらに、完全に僅かな年月が過ぎただけでないこと、私があなたに、“ほら、神の剣が地上に[振り下ろされる]すぐに素早く”、と言ったことをあなたは覚えている。私ではなく、神がそれをあなたに対して説教させているのだ。そして、それがやって来た、やってくる。」³⁸と、自らが神に選ばれた「真の預言者」であることも主張している。

サヴォナローラの「預言者」としての立場は、シャルル8世が出発した後の説教でも遺憾なく発揮された。フィレンツェの政治改革を促す説教において、自分の言う通りに改革が行われれば、「神の側から私があなたに約束したことは一つも欠けない」³⁹と必ず未来の栄光がもたらされることを約束し、その確実さについて「私を信じなさい、私があなたに言うこれらのことは福音書のように真実だ」⁴⁰と述べ、自らを使徒に擬えている。このようなサヴォナローラの自信は、「まだ誰も何もわからなかった時に、私は試練や悪についてあなたに予告していた。そしてあなたはそれがまさに真実だったことを理解した」⁴¹と言っているように、シャルル8世によって何年も説き続けた「神罰」の到来が実現したことに裏付けされていることは明らかだろう。そして、このような確固とした改革の意志と自信は、「フィレンツェよ、私が言ったように、教会とあなたの都市を革新する時であること信じなさい。」⁴²と述べているように、サヴォナローラの最終目的である「教会改革」に向けられていく。

おわりに

これまで述べてきたように、シャルル8世が「神罰」であることは、『ハガイ書についての説教』の1回目の説教から認識され、フランス軍がフィレンツェを出発するまで、それに対する「悔い改め」が繰り返し唱えられた。また、現状を打破し、革新をもたらす「解放者」の役割について言及されたのは、フランス軍の出発後の8回目の説教においてであった。すなわち、サヴォナローラの預言的説

教において、シャルル8世には、フランス軍がフィレンツェを「平和的」に通過するまでは「神罰」、すなわち神の遣わした者ではあるがマイナスの役割のみが課され、通過後はフィレンツェの「解放者」というプラスの役割が付された。このシャルル8世の役割の移行は、実際に、「預言者」としての名声を得ていたサヴォナローラとの三度の会談、説得の結果であったのか否かは明らかではないが、フランス軍の「平和的」通過によってもたらされたといえよう。そして、「神罰」から「解放者」というシャルル8世の役割の移行は、サヴォナローラの「預言」である「教会改革」の担い手、「改革者」のイメージに合致する。すなわち、墮落した現在の体制を破壊し、新たな教会を再編成する人物である。また、旧約聖書における改革者は、聖職者ではなく、キュロスのような世俗的権力の長である。自らを旧約聖書の預言者のひとりに擬えたサヴォナローラは、同様にフランス王であるシャルル8世を旧約聖書の改革者にあてはめたのではないだろうか。さらに、サヴォナローラは、教会改革を担う者として、R. ルスコニー⁴³やM. リーヴス⁴⁴が言うような、危機的状況に現れる「最後の時代の皇帝」や「天使的教皇」といった救世主像を、「解放者」としてのシャルル8世にも期待したとも考えられる。

しかし、『ハガイ書についての説教』における「解放者」の役割を「神罰」と比較すると、シャルル8世に対する「キュロス」の例えが一度のみであることから、サヴォナローラが『天啓大綱』で明確に記しているほど、シャルル8世の「解放者」としての役割はまだ確立されていない。

シャルル8世とフランス軍のフィレンツェ進軍は、「神罰」の到来を説くサヴォナローラの預言的説教によって、単なる侵攻ではなく「神罰」となり、一方、サヴォナローラは、フランス軍のイタリア進軍によって自らの「預言」の一部が実証され、「真の預言者」になり得た。したがって、両者は相互にその存在意義を与え合う関係にあるといえよう。

最後に、サヴォナローラの説教については、その「一貫性」に関して述べられることがある。確かに、自ら受けた「神の啓示」に基づき、「教会改革」を唱え続けた点では一貫しているといえる。しかし、今回述べたように、具体的な預言的説教内容は、周囲の社会的状況に応じて、最終目的である「教会改革」を目指して一步一步階段を上るように、段階をふんで変化する。今後もこの変化に注目し、さらに研究していきたい。

註

- (1) Savonarola, Girolamo, *Prediche sopra Aggeo e Trattato circa il reggimento e governo della città di Firenze*, (Edizione nazionale delle opere di Girolamo Savonarola), a cura di L. Firpo, Roma, 1965 (以下、*Aggeo*と記す)。1545年にヴェネツィアで出版された時のタイトルページによると、この連続説教は二人の修道士によってサヴォナローラの生の声 *viva voce* から筆録された。また、タイトルの『ハガイ書についての説教』は出版時に付けられた。『ハガイ書』とは、旧約聖書にある預言書のひとつで、ハガイは神殿の再建についての主の言葉を民に告げた預言者

である。サヴォナローラは、メディチ家追放の後、新政府体制を模索するフィレンツェ市民に対して、12月に行った説教において、この『ハガイ書』を引用し、新たな政府の樹立を促した。しかし、実際にサヴォナローラが説教中に旧約聖書の『ハガイ書』を引用したのは、23回の説教中の14回目（12月15日）、15回目（12月16日）、16回目（12月17日もしくは18日）、17回目（12月18日もしくは19日）、18回目（12月19日もしくは20日）、21回目（12月25日）の6回にすぎない。11月に行われた説教では、専ら『創世記』を引用している。Ridolfi, Roberto, *Cronologia e bibliografia delle prediche*, Firenze, 1939, pp.46-50.

- (2) Garfagnini, Gian Carlo, "La predicazione sopra Aggeo e i Salmi", in Garfagnini, G. C. ed., *Savonarola e la politica*, Firenze, 1997, pp.3-25.
- (3) Pellegrini, Letizia, "La predicazione come strumento di accusa", in *Girolamo Savonarola: l'uomo e il frate. Atti del 35. Convegno storico internazionale, Todi, 11-14 ottobre 1998*, Spoleto, 1999, pp.161-189.
- (4) Fubini, Riccardo, "Politica e profezia in Savonarola. Considerazioni di uno studioso profano", *Memorie domenicane*, Nuovo serie 29, 1998, pp.573-592.
- (5) 拙稿「サヴォナローラの『天啓大綱』 *Compendio di Rivelazioni* における預言」『岡山大学大学院文化科学研究所紀要』、19、2005、pp.231-246.
- (6) Savonarola, Girolamo, *Compendio di Rivelazioni*, (Edizione nazionale delle opere di Girolamo Savonarola), a cura di A. Crucitti, Roma, 1974 (以下、*Compendio*と記す).
- (7) *Aggeo*, p.10.
- (8) *Aggeo*, p.21.
- (9) 葉種商人ルカ・ランドッチは、サヴォナローラが市政府代表交渉団に選ばれたことについて、彼の日記に、「1494年11月5日に、5人の大使を選んだ。ひとりにはフェッラーラ出身でサン・マルコ修道院に住んでいる聖ドメニコ会の説教師ジローラモ修士だった。私たちは彼が、預言者であると信じているし、彼も説教の中ではそれを否定しないで、いつでも「神の側から」と言っている。そして、様々なことを説教する。」と記している。Landucci, Luca, *Diario fiorentino dal 1450 al 1516*, prefazione di A. Lanza, Firenze, 1985, p.72. (ランドウッチ、ルカ(中森義宗・安保大有訳)、『ランドウッチの日記』、近藤出版社、1988.)
- (10) *Compendio*, pp.16-21.
- (11) *Aggeo*, p.62.
- (12) *Aggeo*, p.69.
- (13) *Aggeo*, p.78.
- (14) 11月23日の6回目の説教の最後に、11月17日に死亡した哲学者ピコ・デラ・ミランドラに関して、以下のように記されている。「説教師が、ここで説教を終えた後、このようなことを言っ

たことを記す。「私はあなた方に一つの秘密を打ち明けたい。それを今まで言いたくはなかった、なぜなら私はここ10時間に得たような確信が、あまりなかったから。あなた方各々が、ここフィレンツェにいて、何日か前に亡くなったジョヴァンニ・デラ・ミランドラ伯爵を知っていたと私は信じている。彼の魂は、修道士たちの祈りや、この世の人生で彼が行ったいくつかの善い行いや、他の祈りのために、煉獄にいと私はあなた方に言う。彼のために祈りなさい。なぜなら、彼は遅すぎて、彼の人生において、望んだように、聖職者になれなかったから。しかし、彼は煉獄にいる。」 Aggeo, p.104.

- (15) Aggeo, p.96.
- (16) Aggeo, p.93.
- (17) Aggeo, p.95.
- (18) Aggeo, p.96.
- (19) Aggeo, p.98.
- (20) Aggeo, p.99.
- (21) Aggeo, p.103.
- (22) Parenti, Piero di Marco, *Storia fiorentina, I: 1476-1478, 1492-1496*, a cura di A. Matucci, Firenze, 1994, p.144.
- (23) Landucci, *op. cit.*, pp.87-88.
- (24) *Compendio*, p.21.
- (25) Aggeo, p.106.
- (26) Aggeo, p.107.
- (27) Aggeo, p.112.
- (28) Aggeo, p.129.
- (29) Aggeo, p.125.
- (30) Aggeo, p.187.
- (31) 15回目の説教で、「普遍的な平和Pace universale」についてこのように語っている。「普遍的平和とはこのようであってほしい。すなわち、あらゆる憎しみや恨みを捨て、この国家の変容によって行われた全てのことについて和解しなければならない。つまり、今まで国家の変容によって行われた全ての刑罰や犯罪が取り消される。しかし、将来では、間違っただ人は罰せられるだろう。」 Aggeo, p.255.
- (32) Aggeo, p.341.
- (33) サヴォナローラは『天啓大綱』に、神の預言の示し方を、①預言者の知性に直接吹き込む ②預言者に創造的幻視において示す ③預言者の外の感覚、特に視覚に示す、という3つの形式にまとめている。 *Compendio*, pp.6-8. (拙稿、p.242。)

- (34) *Aggeo*, p.12.
- (35) *Aggeo*, p.12.
- (36) *Aggeo*, p.32.
- (37) *Aggeo*, p.4.
- (38) *Aggeo*, p.12.
- (39) *Aggeo*, p.378.
- (40) *Aggeo*, p.206.
- (41) *Aggeo*, p.232.
- (42) *Aggeo*, p.234.
- (43) Rusconi, Roberto, *Profezia e profeti alla fine del Medioevo*, Roma, Viella, 1999.
- (44) Reeves, Marjorie, *The influence of prophecy in the later Middle Ages: a study in joachimism*, London, 1993.